

メッセージアウトライン

コロサイ人への手紙 2:16～23 「キリストにある自由」

[16-17]「こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは、祭りや新月や安息日のことについて、だれにもあなたがたを批評させてはなりません。これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです」

「食べ物と飲み物」…旧約に記されているさまざまな規定。→レビ記 11 章（きよいもの、汚れたもの、食べてよいもの、悪いもの）さらに偽教師たちは肉や飲み物などについて禁欲を強いた。「祭りや新月や安息日のこと」…さまざまな秘密の儀式めいた祭りや、新月（毎月第 1 日）や、安息日を守ること。パウロはコロサイ人たちにこのような禁欲生活や律法主義を信仰とすり替えてしまわないようにと警告する。影は本体を離れては存在しない。これらの律法や戒めは次に来るものの影であって本体はキリストにある。本体が現れたなら影は消えなければならない。コロサイ人たちは（私たちも）今やキリストによる旧約の成就の時代に生きている。したがって異端や偽教師たちが主張する律法的、儀式的な規定はもはや過去のものとなっている。→ヘブル 10:1,8:13 コロサイの人々はこのような律法的な束縛から自由にされ救われているので、その信仰の自由に踏みとどまっていなければならない。

[18-19]「あなたがたはことさらに自己卑下をしようとしたり、御使いを礼拝しようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによっていたずらに誇り、かしらに堅く結びつくことをしません。このかしらがもとなり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられるのです」

異端や偽教師たちの言うことを聞いていると、神からのほうび（救い、永遠のいのち、豊かな報い等）がいただけなくなるという警告。彼らの特徴は

- ①ことさらに自己卑下をしようとする…人にほめられたいがために、偽りの謙遜をする。
- ②御使いを礼拝しようとする…神はあまりにも崇高なお方であるので直接近づけない。それで人間を神に取り持ってくれる仲介的な霊力の助けを借りなければならない。その一つが御使い（天使）であり、天使を礼拝することによって神に近づけると考える。
- ③幻を見たことに安住する…神から直接に特別の幻や啓示を受け取ったと主張する。キリストがなしてくださったことや神のみことばよりも人間の感情的興奮による思い込みや神秘的体験に基づく自称キリスト教は人を真の謙遜に導かず、かえって高慢に導く。それはうぬぼれであり、肉の思いに支配されているものである。結局、信仰の正統と異端を決めるものはキリストを誰かということにかかっている。→マタイ 16:15

19 節で言われている「からだ」とは教会のこと。→エペソ 1:23,5:23,30

からだなる教会のいのちの源、活力の源はかしらであるキリストご自身である。「このかしらがもとになり」とあるように、教会の一致はからだの部分と部分の機械的組み合わせによるのではなくキリストとの交わりと絶えざる成長によるのである。→エペソ 4:16

[20-23]「もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのように、『すぎるな。味わうな。さわるな』というような定めに縛られるのですか。そのようなものはすべて、用いれば滅びるものについてであって、人間の戒めと教えによるものです。そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです」

キリスト者はキリストとともに死んで、人の言い伝えやこの世の幼稚な教えから離れた者とされている。

占いや偶像礼拝などとはもう関係がない。それなのにその自由を捨てて古い昔の奴隷状態に逆戻りしようとしているとの警告。

異端が教えていた生き方の見本は「すぎるな、味わうな、さわるな」でありこれらのことばは物質、特に食物に関して使われており、これらは禁欲主義的であり、これらの欲望を殺すことが神に近づく立派な生き方であると考えられていた。

しかし、そのようなものはすべて、用いれば滅びる。すなわち、食べれば消化、吸収、分解されてなくなってしまう。このように異端が禁じているのはみな一時的性格のものであり、それらは「人間の戒めと教えによるもの」であり、人間が勝手に発明し考え出したものである。23節でパウロは異端の持つ三つの点について非難する。

①人間の好き勝手な礼拝…それらは神の定めによらず、人間の個人的好みから作りだされた礼拝行為である。

②謙遜…18節で言及された「ことさらなる自己卑下」つまり偽りの謙遜のこと。

③肉体の苦行…肉体は悪の住み家であり、それゆえ苦しめれば苦しめるほど浄化され、全き人に近づく。これもグノーシス的考え。

以上のような教えがなぜ人々の心を引きつけたのか。それはこれらの異端がキリスト教の真理をより充実させ、より完成に導くものであると主張した点にあった。それゆえ人々の目に「賢いもののように見えた」のである。しかし、それらは結局、人間の傲慢、傲慢に根ざすものであり、罪深い肉の欲望を根本から変えるのには何のききめもなく、まったく無力、非力なのである。

人が新しいものとされるのはただキリストのみによる。→Ⅱコリント 5:17

キリストがなしてくださったこと、そして神のことばに何も付け加えてはならない。それはもう完成しているのである。→黙示録 22:18~19

私たちは神のことばを信仰の糧とし、私たちの助け主、救い主であるイエス・キリストにのみよりすがって、与えられているすばらしい自由を感謝しつつ信仰の道を歩んでいくことが大切である。